

[課題演習概要]

生徒が自己の学習を選択する授業づくり
—英文法の学習に焦点をあてて—

西 木 聖 夏
Seika NISHIKI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：主体的な学び、自己を客観的に捉える、自己選択、自己への気づき

1 研究の目的

現行の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を通して「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考えること」を示す「生きる力」を育むことを目標としている。また、三木(2019)によると、自分の学習を進めていくために必要な要素の1つとして、「自己を客観的に捉えること」と「学習を進める方法」の獲得が挙げられている。

そこで本研究では、生徒の主体的な学びに培う授業づくりを英文法の学習を対象とし、授業の中で次の3段階を設定する。①自己の学習状況を俯瞰し自己の保有する知識と思考の仕方の整理を行うこと、②必要な学習内容を選択すること、③自己の学習方法が適当であったか言語化し振り返ること。

研究の成果と課題については、「自己を客観的に捉えること」と「学習を進める方法」の2点についての課題が顕著であった2名の学習者の状況に着目して考察する。本研究の詳細は、「生徒が自身の学習を選択する授業づくり-英文法の学習に焦点をあてて-」に記載し、本稿では学習者1名(Aと記述)のみを取り上げて記述する。

2 研究の計画

授業前	<ul style="list-style-type: none">○ 対象クラスで生徒の様相観察○ 研究対象生徒の抽出(2名(生徒A・B))○ A・Bと対話(授業前)○ アンケート調査○ 授業の考案<ul style="list-style-type: none">— A・Bに必要な学習内容の考案— 3名(特別支援学級の経験がある英語教師、英語講師、筆者)が持つ、対象文法を解く際の思考の整理○ 教材・学習活動の準備
授業中	○ 生徒が選択できる授業づくりの実践
授業後	○ A・Bと対話(授業後)

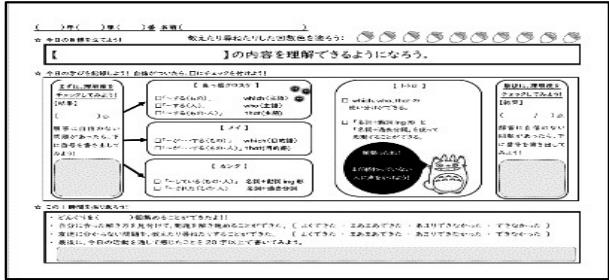
3 研究の内容

(1) 生徒の主体的な学びに培う授業づくりの具体

2022年11月にB中学校第3学年で、定期試験の直前に生徒が学習を選択する授業を実施した。考察対象の2名は、同じクラスである。本授業では、既習内容である文法(関係代名詞、後置修飾)について、左記の①②③の過程を1時間の授業の中で構成した。①では、授業前にアンケート調査と、該当文法の理解度を測るためのチェックシートを用い、②では、学習者の理解状態を考慮した学習内容を3つの中から選択できるように設定し、③では、学習者が自身の学習の跡をもとに学習過程を言語化して振り返る活動を設定した。

また、学習内容と学習の進捗を可視化するための「学習マップ(図1)」を使用した。

図1「学習マップ」



(2) 学習者の状況について(Aの場合)

Aは運動を好み、友人も多い。学習にも積極的で発言や質問の対応、不明点の表明はできる。その一方で、「できない」ことを自虐的に表現する。学習に対し、「勉強をしているのにわからない」と述べ、場当たり的に記憶したり、答えを見て覚えて対応したりする様子が見られた。特に、試験勉

強などの自主学習では、自己にあった学習方法を見出せず、兄弟の学習方法を単に真似をしている。

また、教師や友人が、Aに対し不明点を説明した際に、「分かった」と周囲に伝わるようにオーバーアクションを取る。しかし、Aが理解したと思い込んでいるだけで、実際には間違えるということもあった。

こうした学習状況から、Aの中では、物事の理解の仕方に対して、整理や構造化が図られず、毎時間の学習内容が散乱し繋がりを掴めていない状況にあると予想する。加えて、学習内容の理解よりも、授業中に周囲と同じように振る舞うことを優先している。

(3) 指導上の工夫

こうしたAに対しては、次の2点を考慮した。まず、Aの物事の理解状況に対する配慮である。学習プリントに、「英語の熟達者の思考に沿った形式の問題」を示した。その理由は、Aを含めた文法の学習に困り感を抱いている学習者の多くが、英文に対し句としてのまとまりを持つという認識が不足していることを捉えたからである。

次に、Aの「周囲と同じように振る舞う」ことへの配慮である。難易度別で学習プリントを用意するのではなく、1種類の文法に対して1枚使用し、表裏を活用することで問題の難易度を示す。よって、学習者間での優劣の感覚を防ぐことができる。

4 研究の結果

(1) Aの学習状況について

まずAは、学習プリントを選択する基準として、「チェックシートの結果からどの問題も解けなかったため、最初の学習プリントを選んだ」と述べ、自身の学習状況を俯瞰し適切なものが選択できていた。

次に筆者は、学習者が学習プリントを解く際、自身の学習状況に不必要な問題は選択しなくて良いことを指示すると共に、思考の仕方を空欄補充で理解する「英語の熟達者の思考に沿った形式の問題（難易度が低い問題）」を提示した。これはAのように解答までの思考の道筋が不明な学習者を対象とした。

それに対しAは、不明点について友人に尋ねたり、文法説明の欄を読み返したりしたが、Aに必要な「英語の熟達者の思考に沿った形式の問題（難易度が低い問題）」に立ち返る様子は見られなかった。

最後に、Aの解き方や考え方が不明な問題に出

会った際の対応は、これまでと変わらず、理解や納得はしていなくても、周囲と同じように振る舞うことを無意識に優先していた。しかし、最も大きな違いは、「自分ではわかっているつもりだったが、本当はわかっていない」という自己の状況を理解・納得したことである。そのことは、彼の授業後の言葉や、学びあい活動の対応にも表れた。

(2) 本授業から捉えられたこと

上述した通りAの学習状況から、「自分ではわかっているつもりだったが、本当はわかっていない」という自己の状況を理解・納得したことがわかる。しかし、Aの学習の様子は、学習者自身が捉える学習状況と授業者等、他者が捉えるAの学習状況にズレがあることを示し、また、危惧された「授業中に周囲と同じように振る舞うこと」についても、学習プリントの状況に認められた。

こうした結果から、学習者が「自己を客観的に捉える」ためには、的確に学習者自身が学習状況を捉えることができるように、日常的な授業づくりが必要なことがわかった。また、理解度を高めるだけではなく、自尊心を傷つけずに学習を進めていくことも必要だと再度認識した。

Aの特性は、字が美しいところや物作りが好きなことである。そのAの特性を生かし、「自分なりのノートの取り方」など、Aが得意とすることと学習を組み合わせる授業づくりが提案できるのではないかと推測する。

(3) 研究のまとめ（成果○、今後の課題●）

本研究から、次の4点を捉えることができた。
○学習前のチェックシートの活用は、「自己を客観的に捉えること」に役立つこと。

○同一の学習プリントで問題を選択性にすることで他者の目を気にせずに学習に取り組めること。

●「自己を客観的に捉えること」が正確にできるように、日常的な授業づくりと「必ず解く問題」と「選択して解く問題」を設定すること。

●学習者が得意なことと学習を絡めた授業づくりの考案を進めること。

主な引用・参考文献

- ・文部科学省 2017 「中学校学習指導要領（平成29年告示）総則編」（2023/01/01 最終確認）
- ・三木祐佳里 2019 「教師の意識の変容の考察-学習者の自己学習力育成に関わる過程から-」（福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 第9号 p.113）
- ・坂本純一 「自らの学習を調整する力の育成-ICTの活用を見据えて-」（教職課程センター 研究紀要 第5号）